
魚

百華あお（元・白邪アリス）

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚

【Nコード】

N4781Y

【作者名】

百華あお（元・白邪アリス）

【あらすじ】

なあ、知っているか。城には庭があつて、庭には池があつて、池には魚がいるらしい。死にたがりの殿様は、どうやら随分とご執心のようなのだ。

いつもいつもいつもいつも虚ろな目で私を見るから、死にたいのかと思った。

言うと、いつもいつもいつもいつも死にたいのだと言う。

嘘つけ。死にたくなんかなくせに。言うと、じろりと睨まれる。彼はどうやら自分の気持ちにも気付いていないらしい。どうにもな方だ。こんなに立派なお城を、ましてやこんなにたくさんの民を率いるあなたがそれでいいの？ よくないと思う。私は思う。自分の気持ちに気付けない人が、治める民の気持ちなんて分かるものか。思うのだけれど、どうやら民は自分たちのあるじに対して寛容らしかった。

（城には、庭がある。）

いつもいつもいつもいつも虚ろな目で池を覗き込むから、死にたいのかと思った。

言うと、いつもいつもいつもいつも死ねないのだと言う。

嘘つけ。死にたいんなら飛び込めばいいじゃない。言うと、じろりと睨まれる。

彼はどうやら死ぬ勇氣すらもないらしい。どうにもな方だ。こんなに立派なお城を、ましてやこんなにたくさんの民を率いるあなたがそれでいいの？ よくないと思う。私は思う。自分のために死ぬ勇氣もない人が、治める民のために決断できるものか。

思うのだけれど、どうやら民は自分たちのあるじに対して寛容らしかった。

（庭には、池がある。）

いつもいつもいつもいつも虚ろな目で庭に出てくるから、死にたいのかと思った。

言っと、彼は黙る。

黙ってしまった。黙って、ゆらゆらとうごめく水面を見つめている。

彼はどうやら言葉すらも失くしてしまったらしい。どうにもな方だ。こんなに立派なお城を、ましてやこんなにたくさんの民を率いるあなたがそれでいいの？ よくないと思う。私は思う。自分の言葉も持たない人が、治める民に言葉を与えられるものか。

思うのだけれど、どうやら民は自分たちのあるじに対して寛容らしかった。

（そして池には、魚がいると言う。）

「何で死なないの？」

ある日私は聞いてみた。

聞いてみたが、返事はなかった。

いつも通りに池を覗き込むその蒼白い顔はあるのに、血色の悪い唇は閉ざされたまま。聞こえていないのかとも思ったが、こんなに静まり返った月の夜にそんな馬鹿なことはあるまい。私の言葉は流されたのだと思った。

「じゃあ、何で死にたいの？」

質問を変えてみた。すると、彼はうすく唇を開いた。

「大切な者を……失ったからだ」

「ふーん。恋人？」

「いや」

彼は再び唇を閉ざした。

答える気がないわけじゃなくて、答えを探しているみたい。

私も黙った。

考えている途中なら私に挟む口はない。ぷかりと水面に泡が浮かぶ。ああ、私が間抜けみたいじゃないか。息が中途半端に漏れてしまったみたいで。まあ、それは私ではないのだけれど。

「……恋人、ではない」

「じゃあ何？」

恋人ではないらしい。失ったというその人は。

だったら何だろう。失って死にたくなる人？ 赤の他人じゃありえない。そんな感傷的で傍迷惑な性格で国なんか治められるものか、でもこの国の民はうんぬんかんぬん。

「……恋人ではなかった。だが、友人とも呼べぬ」

月を映す水面に、言葉の続きが放られる。

私のために噛み砕いてくれているのかややこしくしてくれているのか。よく分からないが有難くない。答えがあるならずばつと言ってくればいいのに、それとも未だに答えを模索中なのか。いつも優柔不断なこの人は。

「じゃあ、何で失ったの？」

「……もともと身体の弱い娘だった。それが肺を病んでな」

ふーん。死んだのか。それはどうも……あれ、何て言っただっけ、こういうの。まあいいや。

にしても相手はどうやら娘さんらしい、恋人じゃないとこの人は言うがそれに近いものだったんだろう。片思いか横恋慕か、それとも実らない恋だったのか。身分の高すぎるこの人にとっては、レンアイとやらもあまり順調に行くものではないようだ。身分というのはあればあるほど重たいらしい、この池の水みたいなもんだ。

「じゃあ、やっぱり何で死なないの」

やっぱり答えない。

何で。何でだ。

この人が死にたい理由なら理解した。それが死に値するかどうかは別として——その基準って言うのは人それぞれだと思う——私は

理由をそのまま受け止めた。なのに、死にたいって散々その口で喚きながらその口が喚きながら、こんなうまいことある池を目の前にして沈黙。それって一体どういうことだ。

もし彼が何か色々と煩わしいことを心配しているならあえて言おう、大丈夫だと。人っていうのはこんな小さい池でも死ねるもんだと私は思う。それになかなか深い池だ、立派な城には立派な庭があるように、立派な庭には立派に深い池がある。きっと。少なくともこのお城はそう。

それに、自分がいなくなった後の世を心配するなら、きっとそんなに問題はない。何とかなる。一人死んだところで歴史なんてそう変わりもしないもんで、変わったとしても一人くらいならそれに立て直してやっていける。だから大丈夫。世の中というのはそんなに脆いもんでもなかったりする。

というより、死ぬならいつそひと思いに死んだ方がいいと私は思う。だってこれから死ぬのに残されるもの心配してどうするの。どうせあなたには何もない。失礼だけど何もない。国を治める人っていうのは時に驚くほど何も持っていないかったりする。この人はそのいい例だ。だから大丈夫、死にたいならどうぞ。さすがに死に方が苦しいだの何だのとけちをつけるほど軟弱な人ではないはず。

「死ぬ理由は他にあるの？」

私は問いを続けた。

しかし、あれ。

返事はまたも沈黙、羽虫が遠くで羽ばたく音すら聞こえそうだ。

もしかして図星だから？　もしかして国を治めるのが嫌になっってしまったか、とうとうついに。

それはまあ仕方ない、人だもの、そういう時だってある。なかったら人じゃない。でもだからってそのまま死ぬのは実に傍迷惑な話だ。不愉快極まりない、とか何とか縁側をずんずか歩いていったお城の御老体が言っていた。私的にはその歩き方がお腹の底に響いてどうにも不愉快極まりなかったんだけど。まあそれはそれ。

いや別にいいのよ。私は言う。別にいいのよ、死んだって。前述の通りこれから死ぬ者が憂いなんてたずさえていてどうする。別に死ぬなら勝手に死ねばいいじゃない。私は止めない。止めないよ。私がこうして勝手にぺらぺらとしゃべるように。

「何で死ねないの」

質問を変えてみた。というよりも、変わってしまった。必然的に。そうそれは必然。

質問が変わると、彼はようやく唇を何かの音の形に開いた。読唇術など使えるはずも今後使えるようになる予定もないので、それだけで何の音を発するのかましてや何を言いたいのかが私に分かるはずもなく、この後音を発してくれること前提で言いたいことを理解する予定を立てながら前提がきちんと成り立つ瞬間を私はお行儀よく待つ。

「……彼女が」

彼は呟く。

切れ長の瞳は空からかかる帳と同じ色、でも闇より少し深い。

彼女が？

私がまだまだお行儀よく待っているのを見下ろして、彼は続けた。「彼女が——次は魚に生まれ変わる、と、私に約束したからだ」
ふーん。

私の口から漏れた言葉はそんなもの。言葉というより音に近い。それでなるほど、こうしていつも池を見下ろしているわけ。合点承知、傍迷惑だけど話は理解。死にたいのかと思った。ああいやいや、死にたいんだっけ。でも死ねないのか。

「でもじゃあ何でまだ死にたいの？」

生まれ変わる彼女を健気に待つのだっただけなら死にたくする必要はない。いや、まあ輪廻の何とやら——ああ、これも御老体がね。御老体は嫌いだけど興味深い話ね——が確実に確定のものでない以上、待つ男というのは辛いだろうけど。まあでもそんなに周囲が害されてしまうほどに死にたいを振りまく必要もない。あなたが傍迷惑な

人だとは知っているけれど、そこまでして死にたいを振りまくの？ 私は聞いた。

「……………」

何だかきこちなくて不器用な沈黙、いや、かすかな息の音。

それと同じくきこちなく浮かんだ池を覗き込む笑顔。苦笑、ああでも、もっと切ない感じた。さびしげな笑顔。口は綺麗な弧を描いているにも関わらず、長い睫毛のあたりに皺が寄る。

「理由は、」

理由は。

「あまりに似ておらぬせいだ」

「……………何に？」

ああ、いけない、私としたことが。言葉と言葉の間に沈黙を放ってしまった。

おしゃべりな私らしくない。

自負済みのおしゃべりはどうも言葉の前の沈黙を許しそうにはない、0は無理だけど1にも達してはいけないのだ。その沈黙というのは。

しかし。おしゃべりに弁明。弁解をする。しかしそれというのはこの人のせいだ。あまりに似ていない、どうやら頭の造りが根本的に違っていらしい私たちはその会話を会話として成り立たせることができないのだ。つまり、それがどういう意味だか分からない。だから沈黙は落ちてしまった。

「何に」

形のいい眉を寄せて、彼は繰り返す。別におうむ返しを望んでいるのではないというのに。それか、彼がそれを望んだからか。

「彼女が、だ」

それは答えになっていない。何にと聞いたのに彼女がと答える、それは正しい解とは呼べない気がした。しかしそれで彼は勝手に満足したらしい、やはりこの国の民はどうにも寛容だ。少なくとも私よりは。

「なのに、私は離れられぬ」

たまゆら
玉響に丸い月を仰ぎ見、そうして池に映る月を臨む。

「何から？」

聞いてもやっぱり正しい解答は得られない気がした。でも、おしやべりな私はおしやべりな私らしくない沈黙を少しだけ経てからおしやべりな私として聞いた。

「鏡よ」

予想通りとでも言うべきか、返された答えは一言だけだった。鏡。鏡なんてどこに？　そういえば御老体のお部屋には鏡がないと聞いたけれど、それとこれとは別だろう。じゃあ一体何の話で。

「鏡。池？」

するりと出てきて、そうして私は口にした。そういやここには大きな鏡が一つあった、と。夜半の月を映す円い鏡が。

すると、彼はするすると唇を弧の形に曲げる。

「そうやもしれぬな」

そうやもしれない、しかしそうではないかもしれない。やっぱり答えになっていない。

でも多分間違いのだろう、それは肯定の言葉だけれど同時に否定だ。難しいことは頭の造りがこの人とは根本的に違う私には分からない。

「ねえ。だから死にたいの？」

「そうとも言う」

「そうじゃなかったら一体何？」

「だからいつまでも死ねぬままなのだ」

「ふーん」

変なの。死にたいのだとも言うのに、死にたくないとも言っているようだ。

いや、口では死にたいと言っている。この人は。でもいつも思う通りに、この人は本当には死にたくないんじゃないのだ。こんな相反する二面性を持つこの人が、はたして一国のあるじであっていいもの

か。民はどうにもこうにも寛容らしいが。

「……なあ」

「何？」

ぶくりと大きな泡が水面に吹き出す。

闇夜を吸った瞳が池を見下ろしていた。

「いずれ私がこの池に顔を突っ込んで死ぬと言ったら、お前、迷惑か」

何だかどうやら、嬉しそうな顔だった。

どうしてそれが嬉しいのか頭の造りが根本的に違う私にはいまいち理解できなかったが、とりあえずにも私は答えた。

「うっん。別に」

描いた弧がさらにひん曲がる。にたり、とまでは行かないが。

この人はやけに嬉しそうだが、大体それが嫌なのであれば死ねばいいなんて私は言わない。当然のことだろう。相変わらずこの人の思考は分らない。

「それでは、決めた」

「何を？」

「私はいずれ、鏡の深さに溺れて死のう」

その鏡を覗き込みながら、この人は不思議なことを言う。鏡のことは自分で否定したくせに、今はそれが真実であったかのような物言いだ。

しかし私はそれを指摘することはせずに、別のことを口にした。

「いずれ。じゃあ、まだ死なないんだ」

すると彼は、池から少しだけ顔を離れた。

「まだ、な」

あれほど死にたいと言っていたのに人というのは変わりやすいものだ。こんな人にもついていけるのだから、やっぱり民というのは寛容だ。

思いながら私は空を仰ぐ。顔を離されたことでできた三日月型の隙間から、月が見えていた。

「そうして……そうだな。生まれ変わる時、あの月になろう」

黄金色とも、銀色とも移り変わる見事な望月。

彼も私と同じくそれを仰ぐ。

それを見て、その言葉を吟味して、私が様々な思考の末についに呟いた言葉は、何だかおかしい言葉だった。我ながら。まるで、不本意ながら、頭の造りが彼に少し似てしまったかのように。

「意地悪い」

それでも彼はうすく笑った。声こそ立てなかったが。

どうやら彼には、発した私にも分からないその泡のような言葉の意味が理解できたらしい。

「お前のことよ」

言って、言うだけ言って、ずっと月を仰いでいた。

いつものように、池を覗き込んだりしなかった。

ずっとずっと、池を覗き込むことはなかった。

「やはり、似ておるわ」

鈴の音のように笑う、声を立てて笑う。

慣れたはずの水の重さが、突然重くなったような気さえた。

言った先からこんな風に手の平を返すのだから、人の世は何とも難しいと、魚の私はそんなことを思った。

中空に浮かんだ円い月が、磨き上げられた鏡のように水面を映していた。

（今も魚は、その城の庭のその池で、元気に泳いでいるそうだ。）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4781y/>

魚

2011年11月14日03時32分発行